

京大 広報

KYOTO UNIVERSITY



※ P5905 参照



※ P5898 参照



※ P5910 参照

2024.1
No. 772

目次

【巻頭言】

新しい年を迎えて
総長 湊 長博 5896

【大学の動き】

- 理事補が発令される 5898
- 第18回京都大学ホームカミングデイを開催 5898
- 公開講座 京大知の森（令和5年度秋季）を開催 5900
- 令和5年度定年退職予定教員 5901
- 学童保育所 京都大学キッズコミュニティ KuSuKu（クスク）の開所式を挙行 5905

【部局の動き】

- アジア工科大学の山本和夫 学長が湊 長博 総長を表敬訪問 5907
- 令和5年度京大関係病院長協議会定例総会を開催 5907
- ザンビアにおける水・衛生改善と下痢症リスク低減に向け、共同研究協定を締結 5908
- iPS細胞研究所が国際シンポジウムを開催 5909
- 農学部創立100周年記念式典・記念祝賀会を開催 5910
- 基礎物理学研究所創立70周年記念行事を挙行 5911
- フィールド科学教育研究センター創設20周年記念式典・シンポジウムを開催 5912
- 宇治キャンパスで2023年度安全衛生講習会を開催 5914
- 「京都大学宇治おうばくプラザ 第13回たそがれコンサート」を開催 5915

【寸言】

熱帯雨林への挑戦 島田 卓 5917

【随想】

半世紀ぶりの自作の真空管アンプ
名誉教授 富田 恭彦 5918

【洛書】

研究所の渡り歩きの記 奥地 拓生 5919

【榮譽】

- 佐和隆光 名誉教授が日本学士院会員に選出 5920
- 平井豊博 医学研究科教授、半田知宏 同特定准教授、後藤慎平 iPS細胞研究所教授がベルツ賞を受賞 5920
- 井上浩輔 白眉センター／医学研究科特定准教授、遠藤礼子 工学研究科研究員がMITテクノロジーレビュー主催「Innovators Under 35 Japan 2023」に選出 5921
- 小俣ラポー日登美 白眉センター特定准教授がサントリー学芸賞 [社会・風俗部門] を受賞 5922
- 田辺 理 白眉センター特定准教授が「第35回國華奨励賞」を受賞 5923

【話題】

- 令和5年度総長杯ボウリング大会を開催 5925
- 「業務支援室ニュースレター」を創刊 5925
- 学部生の研究チーム「iGEM Kyoto」が合成生物学の国際大会 iGEM で金賞を受賞 5926

【訃報】

- 作花 濟夫 名誉教授 5928
- 中川 博次 名誉教授 5929



京都大学

所属・職名については、行事開催時点のものです。

巻頭言

新しい年を迎えて

総長 湊 長博



謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

今年は元日から令和6年能登半島地震という非常に大きな災害が起きました。

あらためて、お亡くなりになられた方々には謹んでお悔やみを申し上げますとともに、今なお過酷な避難生活を送られている被災地の皆さまに心よりお見舞いを申し上げます。

また、国際的には、2年に及ぶウクライナの戦乱、昨年10月以降のイスラエルとパレスチナの紛争は収束の兆しが見えません。

2024年は少しでも世界の安全と平和が戻る年になってほしいと心から願っております。

ウクライナ情勢に対しては、本学として少しでも貢献したい思いから、ウクライナ危機支援基金を立ち上げておりましたが、たくさんのご支援をいただき、一昨年に続き昨年もウクライナの学生を受け入れることができました。不安な思いをしてきた彼らが、日本の生活に適応し頑張って勉学に励んでいる様子を目の当たりにし、ほっとしているところです。イスラエルとパレスチナの紛争についても悲惨な状況が報道されておりますが、戦乱の地域を含め、できるだけ多くの留学生を受け入れる形で貢献したいと思っております。

一方で、新型コロナウイルス感染症は昨年5月に感染症法上の位置付けが5類に移行して、ようやくさまざまな活動が通常に戻ってきており、国際交流の再開も本格化してきたという感じがしています。

昨年には、日本とASEANの友好協力50周年を迎えましたが、ASEANやインドを含むアジアはわが国にとってますます重要な地域となっており、歴史的にこの地域との連携に強みを持つ本学においても、長期的視野で活動を発展させ、協力関係をさらに強化していく必要があるでしょう。

現在の日本では、失われた30年とも呼ばれる経済低迷に加え、急速に少子化が進む中、わが国の大学の研究力の国際競争力と発信力の相対的な低下が、日本の科学技術立国としての将来的な成長への大きな懸念とされています。

このような状況下で、本学が研究力をさらに強化し、世界に伍する研究大学としてこれからも成長し続けていくためには、抜本的な大学の構造改革が必要であると考えています。将来にわたっての研究力強化の最重要課題の一つは、若手研究者をどのように育成していくか、その研究活動を支援する専門人材や研究環境をどのように整えていくか、ということです。ひと言で言えば、「人への投資」ということです。若手教職員が育つことにより、これまで以上に研究のポテンシャルが強化され、それによって確固とした国際的な認知と承認を得ることが可能になると思います。

巻頭言

当然そのためには、安定的かつ自立的な財務基盤を確立していくということも重要です。

そういう意味で、今年は大学の構造改革の推進元年としたいと考えています。

大学が将来に向けて成長する仕組みを自ら考え進めていく体制を構築するため、すでに若手教職員にその具体案を議論していただいております。若い世代から新鮮でかつ大胆な改革案が提示されることを期待しています。

構造改革の一つの柱は事務組織改革です。複雑化を増す大学の業務運営を円滑に行うためには、複合的な課題に柔軟かつ効率的に対応しうるフラットなフロントオフィスと、その調整機能を担うバックオフィスが連携して、大学の成長を支えられる体制づくりが必要であろうと考えています。そこでは旧来の縦割りによる所掌の壁をできるかぎり取り払い、各人が自由に最大限のパフォーマンスを発揮できるオープンな環境が必須です。

この事務組織改革を進めるためには、とくに多様な人材の確保が重要です。教員だけではなく職員も職種に関わらず、性別や国籍、世代などを超えてさまざまな特性を備えた人材が集い、皆が安心して働ける環境を整備することが、非常に重要な要素になるでしょう。

近年では全学的に男女共同参画の取り組みを着実に進めており、その一環として昨年12月には、学童保育所 京都大学キッズコミュニティ KuSuKu (クスク) を開設しました。子育て世代の教職員には、働きやすい環境を整える大きな一助になることを期待しています。

大学の構造改革は、構成員個々人の意識改革とコミットメントが伴わないかぎりその実現は困難だと思います。意識改革には相応の時間もかかるでしょうが、意識改革なしにどれだけ体制を整えても単に形だけで終わってしまいかねないでしょう。

あらゆる部門が一致協力し、さまざまな事柄にしなやかに対応できる、レジリエンスの高い機動的な組織を確立していくことが、大学の自立化と成長のための基礎であると私は考えています。

本年も皆さまのご協力をいただきますようお願い申し上げます。年頭挨拶とさせていただきます。

本年もどうぞよろしく願いいたします。

(令和6年1月9日(火)、事務職員を対象として開催した『総長年頭挨拶』より)

[目次に戻る ↗](#)

理事補が発令される

補佐する理事	氏名	任期	
教育担当理事 入試担当理事 学生担当理事	大嶋正裕	令和6年1月1日～令和6年3月31日	(新任)

[目次に戻る ↗](#)

第18回京都大学ホームカミングデイを開催

第18回ホームカミングデイを、対面開催とオンライン開催のハイブリッド形式で開催しました。対面形式は2023年11月4日(土)に開催し、同窓生(卒業生、修了生、元教職員)、教職員、学生、一般の方など767名が参加しました。オンライン形式は2023年11月4日(土)～30日(木)に開催し、日本全国および海外も含め、1,247名のアクセスがありました。

百周年時計台記念館百周年記念ホールでは、午前に講演会、午後に音楽会を行いました。講演会は湊長博 総長の挨拶に始まり、卒業生で小説家の万城目学氏(法学部・2000年卒)が「京都を描くということ」と題した講演を行いました。学生時代の思い出や過去に本学で講演したときの話、また、久しぶりに京都を舞台に描いた最新作についての話がありました。音楽会では、京都大学応援団による演舞演奏、京都大学グリークラブの合唱、京大合唱団と同窓会合唱団による合唱を行い、大きな拍手が湧き起こりました。

施設見学では、総合博物館、附属図書館、尊攘堂を無料で一般公開し、また、抽選で同窓生に向けて清風荘の見学を行いました。

スタンプラリーでは、本部構内、吉田南構内の各スポットに設置されたスタンプを集めた参加者に、景品の絵葉書セットを配布しました。子どもや留学生などたくさんの参加があり、景品



挨拶を行う湊総長



講演をする万城目氏



京都大学応援団の演舞



京都大学グリークラブの合唱



京大合唱団と同窓会合唱団による演唱

大学の 動き

を喜んで受け取る様子が見られました。また、今年は全スタンプのうち、5ヵ所にQRコードを設置し、自撮りした写真をオンラインに投稿する「みんなで作る思い出のアルバム」も実施し、参加者が当日に撮影した写真をオンラインで楽しむことができました。

お昼には、昨年好評であった湊総長監修特別ランチメニュー「京の和風オイルパスタ」が、京都大学生生活協同組合が運営する「カフェレストラン・カンフォーラ」にて販売されました。

オンラインコンテンツでは、対面にて撮影した講演会での湊総長の開会挨拶、音楽会での応援団の演舞と合唱の動画を配信しました。そのほか、「京都大学白浜水族館探訪」では、普段見ることのできない水族館のバックヤードの紹介、「懐かしい京大生協食堂の今昔」では、食堂の懐かしい写真や歴史を振り返って説明するコンテンツを掲載しました。

来年も、対面とオンラインの両形式によるハイブリッド開催を継続する予定であり、対面形式は2024年11月2日(土)に開催する予定です。



施設見学（尊攘堂）



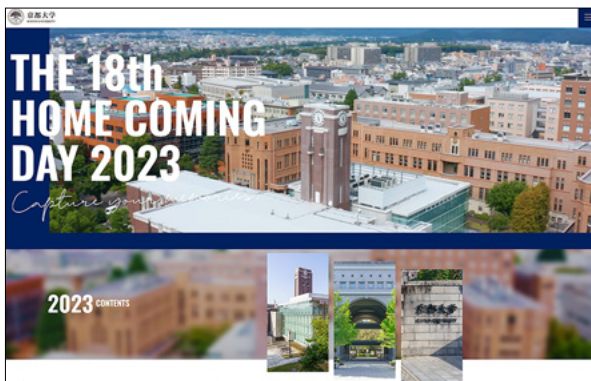
清風荘の見学



スタンプラリーの様子



配布した絵葉書セット



オンラインのサイト

(渉外部(渉外課))

[目次に戻る ↗](#)

公開講座 京大知の森（令和5年度秋季）を開催

公開講座 京大知の森（令和5年度秋季）を、2023年12月10日（日）に、国際科学イノベーション棟シンポジウムホールにて開催しました。

公開講座 京大知の森は、京都大学の知を広く学内外の人々に向けて発信するため、2023（令和5）年秋から開催する公開講座です。研究者の手引きのもと、講演や討論を通して多様な研究分野を持つ本学の「知の森」に分け入り、研究の面白さや意義をお伝えすることを目的としています。

記念すべき第1回の今回は、メインテーマを「ChatGPTの衝撃－可能性と脅威－」として、黒橋禎夫 情報学研究科特定教授／国立情報学研究所長による「ChatGPTの仕組みと社会へのインパクト」、鈴木晶子 名誉教授／理化学研究所客員主管研究員による「ヒューマン・トランスフォーメーション（HX）の新段階」と題した2コマの講演に加え、講師による対談を行いました。



講演する黒橋特定教授



講演する鈴木名誉教授

当日は262名が参加し、対談中に行った質疑応答では参加者から鋭い質問が寄せられ、生成AIの仕組みや人間との関係性についての関心の高さがうかがえました。

参加者からは、「ChatGPTが学習するのはあくまでもネット上の情報で、そこに真実が必ずしもあるわけではないので、使う者が賢くなるのが大事なのだと思いました」、「これから生成AIとの付き合い方を真剣に考えていかなければならない、使いこなせるようにならなければならないと思います」、「新たな気づきがあり参加してよかったです」などの感想が多数寄せられました。

【関連リンク】

本講演内容は「KyotoU Channel」にて配信しており、申し込み不要でどなたでもご覧いただけます。

KyotoU Channel

<https://www.channel.pr.kyoto-u.ac.jp/>



対談の様子



会場の様子

（渉外部（渉外課））

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

令和5年度定年退職予定教員

京都大学教員定年規程により、教員76名(教授64名、准教授9名、講師1名、助教2名)が2024年3月31日付けで退職の予定です。

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
文学研究科	松村 朋彦	文献文化学専攻 西洋文献文化学講座	近代ドイツ文学、特にドイツ文学のモチーフ史に関する研究
法学研究科	辻井 綾	法政理論専攻	国際政治経済学 アジア太平洋を中心として
	前田 雅弘	法政理論専攻 企業関係法講座	商法に関する研究
	川濱 昇	法政理論専攻 企業関係法講座	独占禁止法の基礎理論の研究、競争法をめぐる効率性と公正性の研究 競争法と企業組織の相互関係の研究
理学研究科	藤 定義	物理学・宇宙物理学専攻 非線形物理学講座	流体物理学、特に乱流の秩序構造、乱れ生成、乱流統計
	寺嶋 孝仁	物理学・宇宙物理学専攻 物質物理学講座	遷移金属化合物の薄膜成長と物性に関する研究
	永江 知文	物理学・宇宙物理学専攻 核物理学講座	クォーク多体系の分光による高密度ハドロン物質の実験的研究
	山路 敦	地球惑星科学専攻 地球生物圏史講座	構造地質学、テクトニクス、特に日本列島の形成史および地質学的時間スケールの応力場変遷に関する研究
	久保 厚	化学専攻 物性化学講座	NMR スピン拡散の実験を題材にした量子力学と不可逆過程エントロピー生成の矛盾に関する研究
	有賀 哲也	化学専攻 無機化学講座	固体表面および固体表面に生成した低次元物質の研究
医学研究科	萩原 正敏	医学専攻 生体構造医学講座	RNA 発現制御の基礎研究と、先天性疾患、癌、ウイルス感染症、疼痛などに対するアカデミア創薬研究
	高橋 良輔	医学専攻 脳病態生理学講座	神経変性疾患、特にパーキンソン病とその関連疾患の病態解明と新規治療法開発に関する分子細胞生物学的研究
	佐藤 俊哉	社会健康医学系専攻 健康解析学講座	医療統計学の方法論に関する研究
	古川 壽亮	社会健康医学系専攻 健康要因学講座	コモンメンタルディスオーダーを中心とした臨床試験とエビデンス統合、臨床疫学・メタ疫学の方法論的研究
	黒木 裕士	人間健康科学系専攻 先端理学療法学講座	運動器リハビリテーション学、特に運動器理学療法学ならびに基礎理学療法学に関する研究
	岡 昌吾	人間健康科学系専攻 基礎系医療科学講座	生体機能分子としての糖鎖に内在される情報解読に関する研究
薬学研究科	中山 和久	薬科学専攻 生体情報薬学講座	纖毛内タンパク質輸送と纖毛病の分子基盤に関する研究

大学の
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
工 学 研 究 科	米 田 稔	都市環境工学専攻 環境システム工学講座	環境中有害物質の挙動とリスク評価法に関する研究
	杉 村 博 之	材料工学専攻 材料機能学講座	材料表面の機能化と分析評価に関する研究
	松 原 誠二郎	材料化学専攻 有機材料化学講座	有機反応開発に関する研究 デジタル有機合成に関する研究
	田 中 庸 裕	分子工学専攻 応用反応化学講座	触媒反応メカニズムの解明と高効率触媒の開発に関する研究
	松 岡 秀 樹	高分子化学専攻 先端機能高分子講座	高分子界面化学に関する研究
	松 坂 修 二	化学工学専攻 化学システム工学講座	粉体・粒子の特性評価法の高度化と先進ハンドリング技術に関する研究
	大 嶋 正 裕	化学工学専攻 化学システム工学講座	プラスチック発泡成形加工、超臨界流体利用高分子加工、ならびにプロセス制御システムに関する研究
農 学 研 究 科	白 岩 立 彦	農学専攻 作物科学講座	ダイズおよびイネの多収性ならびに環境変動に対する生育収量応答に関する研究
	大 澤 直 哉	森林科学専攻 森林環境科学講座	動植物の相互関係に着目した森林生態系の構造や機能に関する研究
	松 下 幸 司	森林科学専攻 森林保全管理学講座	森林計画制度に関する研究 森林・林業の統計に関する研究 入会林野・生産森林組合に関する研究
	吉 岡 まり子	森林科学専攻 生物材料科学講座	植物バイオマスの高付加価値材料化に関する研究
	坂 本 正 弘	森林科学専攻 生物材料科学講座	タケ類に関する分子遺伝学的研究ならびに細胞壁ヘミセルロースの生合成に関する研究
	廣 岡 博 之	応用生物科学専攻 動物機能開発学講座	システムアプローチによる持続可能な家畜生産システムの構築と評価に関する研究
	浅 見 淳 之	生物資源経済学専攻 国際農林経済学講座	開発途上国、中国、日本のフォーマル、インフォーマルな農村制度に関する新制度派経済学による研究
	足 立 芳 宏	生物資源経済学専攻 比較農史農学論講座	20世紀ドイツ農村の社会史研究、東ドイツの農業集団化に関する研究、冷戦期の農業開発に関する比較史研究
	入 江 一 浩	食品生物科学専攻 食品生命科学講座	(生物有機化学) がん、アルツハイマー病に関わるタンパク質の構造機能解析に基づく薬剤開発
中 崎 鉄 也	附属農場	作物生産を革新するための基盤となる栽培生理学および育種学的研究	

大学の
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
人間・環境学 研 究 科	廣 野 由美子	人間・環境学専攻 芸術文化講座	英文学、イギリス小説研究
	桂 山 康 司	人間・環境学専攻 芸術文化講座	英国詩人ジョン・ミルトンとG・M・ ホプキンスを中心とする、英文学 史上における詩的表現力に関する 研究
	合 田 昌 史	人間・環境学専攻 共生世界講座	大航海時代の海事史・科学史・心 性史的研究
エネルギー科学 研 究 科	萩 原 理 加	エネルギー基礎科学専攻 エネルギー反応学講座	溶融塩ならびにイオン液体に関す る研究 機能性フッ素化合物に関する研究
	柏 谷 悦 章	エネルギー応用科学専攻 エネルギー材料学講座	製鉄分野における省資源・省エネ ルギーによるCO ₂ 排出削減と水素 製鉄の理論的・実験的研究
	平 藤 哲 司	エネルギー応用科学専攻 エネルギー材料学講座	エネルギー材料の材料プロセスに 関する研究
情報学研究科	磯 祐 介	情報学専攻 応用解析学講座	微分方程式および積分方程式に対 する数値解析学ならびに非適切問 題解析学の研究
	高 木 直 史	情報学専攻 コンピュータ工学講座	ハードウェアアルゴリズム、演算 回路、超伝導デジタル回路設計お よび設計支援技術の研究
生命科学研究所	酒 卷 和 弘	高次生命科学専攻 体制制御学講座	細胞死に関する研究
	垣 塚 彰	高次生命科学専攻 高次生体統御学講座	現在治療法が無い眼科疾患、皮膚 疾患、循環器疾患、代謝疾患、神 経疾患、老化、癌等の病態制御を 目指す研究
	松 田 道 行	附属生命情報解析教育セ ンター	細胞生物学、システム生物学、バイ オイメージング、実験病理学の研究
地球環境学堂	星 野 敏	地球益学廊	農村計画学、特に農村コミュニティ 計画論に関する研究
	柴 田 昌 三	地球親和技術学廊	竹類の生理生態的研究 里山植生の再生に関する研究 都市緑地の環境緩和と生物多様性 保全に関する研究
	梶 井 克 純	資源循環学廊	大気化学反応に関する研究 大気汚染物質の生成と制御に関す る研究 超高感度大気組成分析装置の開発
経営管理研究部	原 良 憲	経営管理講座	サービス・ホスピタリティ領域にお けるイノベーション・マネジメント、 価値創出、社会持続性に関する研 究
化学研究所	青 山 卓 史	生体機能化学研究系	植物分子生物学 主に植物細胞形態形成の制御に関 わる遺伝子発現調節および細胞内 情報伝達機構の研究
	金 光 義 彦	附属元素科学国際研究セ ンター	光物性物理学、特にレーザー分光 による半導体の光物性・光機能に 関する研究

大学の
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
人文科学研究所	佐藤 淳二	文化研究創成研究部門	近現代のヨーロッパにおける科学 と思想の歴史の哲学的研究
	籠谷 直人	文化連関研究部門	華僑ネットワークと戦前期日本の 研究 アジア人系通商網を通じた 日本経済の対外依存性を解明する
医生物学研究所	生田 宏一	ウイルス感染研究部門	サイトカインによる免疫系の構築 と機能の制御に関する研究
	田畑 泰彦	再生組織構築研究部門	体内で用いる、あるいは細胞、生体 成分、細菌、ウイルスなどと触れて 用いる生体材料に関する研究
エネルギー 理工学研究所	森井 孝	エネルギー利用過程研究 部門	タンパク質と核酸の分子認識と組 織化による機能設計の化学に関する 研究
生存圏研究所	矢崎 一史	生存圏診断統御研究系	植物の二次代謝、特に生理活性成分 の生合成と輸送・蓄積の分子機 構に関する研究
	渡邊 隆司	生存圏診断統御研究系	リグノセルロース系バイオマスの 構造解析と有用物質への変換に関 する研究
	矢野 浩之	生存圏開発創成研究系	木材の物理特性に関する解明およ びセルロースナノファイバーの製 造と利用に関する研究
防災研究所	岩田 知孝	地震防災研究部門	強震動地震学、特に震源過程、表 層地質が地震動に与える影響、極 大地震動、長周期地震動に関する 研究
	齊藤 隆志	地盤災害研究部門	土砂災害予測基本図の開発、南極 氷床深層掘削、豪雨および地震に よる土砂災害発生位置予測法の研 究
	丸山 敬	気象・水象災害研究部門	強風災害、建築防災、風工学、数 値流体力学に関する地面付近の気 流性状に関する研究
	片尾 浩	附属地震災害研究セン ター	近畿地方の地震活動および地殻構 造に関する研究
	井口 正人	附属火山活動研究セン ター	火山活動機構と火山噴火予知に関 する研究、噴火ハザード、特に、 火山灰、噴石、溶岩流の予測に関 する研究
複合原子力科学 研 究 所	森本 幸生	放射線生命科学研究部門	超分子複合体の高次構造と機能の 相関に関する研究
東南アジア地域 研究 研 究 所	速水 洋子	相関地域研究部門	東南アジア大陸部の社会・文化に 関する文化人類学的研究
	河野 泰之	環境共生研究部門	東南アジアおよびその周辺域の農 業と農村社会に関する研究
学 術 情 報 メディアセンター	牛島 省	コンピューティング研究 部門	高性能計算を利用する応用力学、 特に多相連成場に対する数値流体 力学
野生動物研究 セ ン タ ー	Huffman, Michael Alan	陸圏保全研究部門	霊長類の自己治療行動の進化、宿 主・寄生虫間の生態学、および社 会学習による文化的行動に関する 縦断的研究

大学の
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
フィールド科学 教育研究センター	朝 倉 彰	海洋生態系部門	海産無脊椎動物多様性学に関する 研究
国際高等教育院	森 和 俊	生物学教室	ゲノム情報発現において重要な役 割を果たす小胞体ストレス応答の 分子機構と生物学的意義に関する 研究
	吉 田 万里子	英語教室	労働契約法、就業規則、従業員代 表制度 欧州法・ドイツ法との比較法研究
	田 中 真 介	保健体育教室	遺伝子変異の分子機構と進化的意 義、人間的価値形成の理論と実践、 自己信頼性と社会的交流性の発達 連関に基づく教育理論の体系化
	STEWART, Timothy William	附属国際学術言語教育セ ンター	英語の教授法研究、英語の教材開 発研究、英語の授業研究、専門教 育と英語教育との連携
環境安全保健機構	橋 本 訓	安全管理部門	大気中での化学反応に関する研究 化学物質の安全に関する研究
	川 本 卓 男	放射線管理部門	生体材料および機能性有機化合物 に関する研究 放射線や放射性同位元素の利用お よび管理に関する研究

(人事部(人事企画課))

[目次に戻る](#)

学童保育所 京都大学キッズコミュニティ KuSuKu (クスク) の開所式を挙

学童保育所 京都大学キッズコミュニティ KuSuKu(クスク)の開所式を、2023年12月4日(月)に、大学文書館(旧京大会館)にて挙

行しました。開所式には、里見朋香 文部科学省大臣官房審議官(総合教育政策局担当)、西脇隆俊 京都府知事の代理として東江起欣 京都府健康福祉部副部長、門川大作 京都市長の代理として齋藤卓也 京都市子ども若者はぐくみ局子ども若者未来部育成推進課長、一級建築士事務所o+hの大西麻貴氏および百田有希氏、加藤 洋 カリモク家具株式会社取締役副社長、大久保昇 株式会社内田洋行代表取締役社長、長畑久美子 株式会社パソナフォスター代表取締役社長、綿越貴久 京都市立第四錦林小学校元校長、橋寺由紀子 株式会社フェニクシー代表取締役社長ら来賓者、本学からは、湊 長博 総長をはじめとする関係理事、関係部局長などが参加しました。

湊総長の挨拶と来賓の祝辞に続いて、テープカットが行われました。その後、稲垣恭



挨拶を行う湊総長



祝辞を述べる里見審議官

大学の
動き

子 理事・副学長が KuSuKu の全体概要およびコンセプトに関する説明を行いました。

最後に、当施設の設計を担当した大西氏および百田氏、家具等の製作を担当した加藤副社長の説明のもと内覧を行い、参加者は興味深く施設を見学しました。

開所式は終始和やかな雰囲気、参加者からは、今後の運営に期待する声が多く寄せられました。



テープカットの様子



KuSuKu の全体概要などを説明する稲垣理事

(人事部 (職員育成課))

[目次に戻る ↗](#)



アジア工科大学の山本和夫 学長が湊 長博 総長を表敬訪問

アジア工科大学 (AIT, Asian Institute of Technology) の山本和夫 学長が2023年10月4日(水)に本学を訪れ、湊 長博 総長を表敬訪問されました。AITは1959年創立のSEATO工科大学院大学に由来し、1967年にSEATOから独立したタイ王国政府公認の国際大学院大学です。アジア途上国を中心とした学生を教育しており、日本は、教員の派遣(1969～2007年)や奨学金の供与などで貢献しています。山本学長は東京大学名誉教授で、在任中にAITにおいてJICA派遣教員、副学長を経験され、2022年9月に暫定学長、その1年後の2023年9月、正式に学長に就任されました。今回の訪問は、外務省、JICA、東京大学総長など日本の主要機関への就任挨拶の一環です。なお、山本学長は、副学長として2014年3月5日にも本学を表敬訪問されています。



山本学長(左端)の面談風景

本学は、これまで約10名の教員をAITに派遣したほか、約50名のAIT修了生を、工学研究科や地球環境学舎の博士課程に国費奨学生として受け入れてきました。今回の総長との面談では、河野泰之 副学長、須崎純一 工学研究科教授、藤井滋穂 地球環境学舎客員教授(京大名誉教授)の3名の元AIT派遣教員および越後信哉 地球環境学舎教授が同席し、国際教育の抱える問題や教育・研究の国際化における課題を広く議論しました。その後、記念品の交換、集合写真の撮影を行い、表敬訪問は終了しました。



山本学長から湊総長へのプレゼント(AITプレート)



集合写真(左から、須崎教授、藤井名誉教授、河野副学長、山本学長、湊総長、越後教授)

(大学院地球環境学舎)

[目次に戻る ↗](#)

令和5年度京大関係病院長協議会定例総会を開催

医学部附属病院は、2023年10月27日(金)に令和5年度京大関係病院長協議会定例総会を芝蘭会館にて開催しました。本協議会は、同会員である関係病院長が親睦を深めるとともに、医学の進歩発達および病院経営の合理化を企画することを目的として年1回、定例総会を開催しているものであり、学内外から現地参加・WEB参加合わせて160名余りが参加しました。

定例総会では、高折晃史 病院長の開会挨拶、「京大病院の現状について」の報告のあと、尾

部局の
動き

野 亘 教授(循環器内科長)、
荒川芳輝 教授(脳神経外科
長)、河井昌彦 特定教授(総
合周産期母子医療センター
長)、片岡仁美 教授(医学教育
国際化推進センター長)より新
任者挨拶が行われました。

続いて、医師の働き方改革
への取り組みや課題について、
高折病院長がコーディネーター
となり、パネルディスカッショ
ンが実施されました。パネリス
トとして稲垣暢也 理事長(公
益財団法人田附興風会医学研
究所北野病院)、木原康樹 病
院長(地方独立行政法人神戸
市民病院機構神戸市立医療セ
ンター中央市民病院)、腰地孝
昭 病院長(一般財団法人平成
紫川会小倉記念病院)より、そ
れぞれ講演が行われた後、質
疑応答では、関係病院の先生方との活発な意見交換が行われました。

その後、武藤 学 教授(腫瘍内科長)より京大病院治験ネットワーク事業ワーキンググループの進捗状況、および高折病院長より京都大学医学部附属病院開設125周年記念事業について報告があり、充実した定例総会となりました。

(医学部附属病院)

[目次に戻る](#)



挨拶する高折病院長



講演する稲垣理事長



講演する木原病院長



講演する腰地病院長

ザンビアにおける水・衛生改善と下痢症リスク低減に向け、共同研究協定を締結

アフリカ大陸南部に位置するザンビアの都市では一部で上水道が整備されつつあるものの、都市周縁地域の多くのスラムでは共同水栓が広く利用され、台所やトイレなどの生活環境中の汚染を背景に家庭で貯留する飲用水が汚染され、下痢症のリスクが非常に高い状況にあります。ザンビアにおける水・衛生改善と下痢症リスク低減に向け、本学は2023年11月8日(水)にザンビア大学と共同研究協定を締結しました。



ザンビア大学副学長(中央)との調印式

部局の
動き

共同研究協定締結に合わせて、研究代表者である原田英典 アジア・アフリカ地域研究研究科准教授がルサカ市の調査地を視察しました。原田准教授は、SDG6の公式モニタリングメカニズムでもあるWHO/UNICEF「水と衛生に関する共同モニタリング・プログラム」の諮問委員も務めています。これまでアジアおよびアフリカ諸国の都市における下水・汚泥管理や、農村の資源循環型トイレ、スラムにおけるし尿汚染と下痢リスクに関する研究を行ってきました。本共同研究では、ルサカ市周縁地域のスラムを対象に、地域住民自身が水・衛生環境の汚染を自ら測定しながら、汚染レベルと下痢リスクをスマートフォンアプリを使って「見える化」することで、下痢リスクを低減する参加型手法の開発を目指します。

本共同研究は、国際協力機構（JICA）および科学技術振興機構（JST）の支援による地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム（SATREPS）の「下痢リスク可視化によるアフリカ都市周縁地域の参加型水・衛生計画と水・衛生統計プロジェクト」として実施されます。研究には、日本国内からは、本学のアフリカ地域研究資料センターなど5つの研究科等と、北海道大学、東北大学、関西医科大学、立命館大学、南山大学らが参画し、ザンビアのザンビア大学、ルサカ市公衆衛生局、ルサカ市水衛生公社とともに2024年度から5年間にわたり研究を行う予定です。



調査地の屋外トイレを視察する原田准教授



本共同研究に協力予定の地域住民グループ

(アフリカ地域研究資料センター)

[目次に戻る ↗](#)

iPS 細胞研究所が国際シンポジウムを開催

iPS細胞研究所(CiRA)は、2023年11月29日(水)、30日(木)に、百周年時計台記念館にて、幹細胞研究者・学生を対象とした国際シンポジウム「シンCiRA～The voyage of discovery by having new eyes～」を開催しました。9回目となる今回は、10カ国約300名の研究者らが参加し、国内外から16名の著名な幹細胞研究者が講演を行いました。

29日には、座長である山中伸弥 CiRA 名誉所長・教授の紹介を受けて、2023年にノーベル医学生理学賞を受賞したカタリン・カリコ教授（ハンガリー・セゲド大学/アメリカ・ペンシルベニア大学）がオンラインで、メッセンジャー RNA (mRNA) を用いた治療法開発の経緯について講演を行いました。

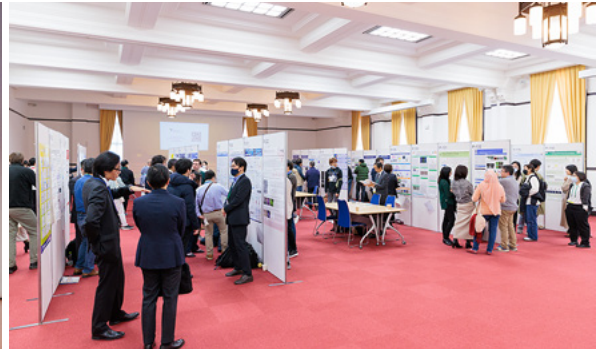
同シンポジウムでは2日間で、カリコ教授の講演を含め3つの基調講演、「基礎科学」「新しいアプローチ」「再生医療」という3つのセッション、科学誌編集者による講演が行われました。このほか、約60件のポスター発表があり、4名の若手研究者に優秀ポスター賞が授与されまし

部局の
動き

た。また、国内外の研究者が昼食会や懇親会などを通じて、活発な情報交換や議論を繰り広げ、研究交流を深めました。



講演者・座長らの集合写真



ポスターセッションの様子

(iPS 細胞研究所)

[目次に戻る](#)

農学部創立 100 周年記念式典・記念祝賀会を開催

農学部は、創立 100 年の節目を迎えたことを記念して、農学部創立 100 周年記念式典および記念祝賀会を、2023 年 11 月 11 日（土）に京都ブライトンホテルにて開催しました。

記念式典では、澤山茂樹 農学研究科長の式辞の後、湊 長博 総長の挨拶に続き、西條正明 文部科学省大臣官房審議官、安岡澄人 農林水産省消費・安全局長、西脇隆俊 京都府知事（鈴木貴典 副知事代読）、門川大作 京都市長（岡田憲和 副市長代読）が祝辞を述べました。最後に、京都大学交響楽団が木管五重奏の演奏を行い、厳かで優雅な記念式典となりました。

続いて行ったパネルディスカッションでは、各界で活躍する卒業生のうち、若手の事業家、研究者として、株式会社ジーンクエスト取締役ファウンダー 高橋祥子氏、国際農林水産業研究センタープロジェクトリーダー 辻本泰弘氏、国立環境研究所主任研究員 安藤温子氏および株式会社マイファーム代表取締役 西辻一真氏の 4 名をパネリストに迎え、北島 薫 農学研究科副研究科長をモデレーターに、「2050 年に向けた『生命・食料・環境』の重要課題」をテーマに、農学という学問分野が、日本や世界の人々と環境の未来にどのような貢献をすることができるのか、するべきかについて、活発な意見交換を行いました。

記念祝賀会は、農学部の学生が伏見の招徳酒造株式会社と共同開発した有機純米酒「京大農（の）酒 樟玉（カンフォーラ）」にて鏡開きの後、元農学研究科長の丸山利輔 名誉教授によ



記念式典の様子



パネルディスカッションの様子

部局の
動き

る乾杯の発声で始まりました。しばらくの歓談の後、前農学研究科長の村上 章 総合生存学館長のスピーチがあり、農学部・農学研究科のさらなる躍進に向けて熱い声援と期待が寄せられました。後半には、附属農場および附属牧場で生産され、農学部が自信を持つ農産品・畜産品を賞品としたお楽しみ抽選会が行われ、会場は大いに盛り上がり、終始和やかな雰囲気の中、同会は盛会のうちに幕を閉じました。



鏡開きの様子

(大学院農学研究科)

[目次に戻る](#)

基礎物理学研究所創立 70 周年記念行事を挙行

基礎物理学研究所は創立 70 周年を記念して、2023 年 11 月 21 日 (火)、22 日 (水) の 2 日間にわたり、記念行事を湯川記念館および百周年時計台記念館にて開催し、関係者約 180 名が参加しました。

21 日は、3 名の研究者による分野レビュー講演のほか、記念講演、記念式典、祝賀会を行いました。記念講演会では、梶田隆章 東京大学宇宙線研究所教授が「基礎物理学の実験の展望－宇宙線や非加速器実験－」の演題で、近年行われた大規模実験施設での成果や課題、世界における日本の実験物理学の重要性、国際共同研究への展開について講演しました。

記念式典では、青木慎也 基礎物理学研究所長が式辞の中で、創設から現在までの発展の経緯とともに、所員一同一層研究に邁進する覚悟であることを述べました。また、湊 長博 総長 (岩井一宏 理事・副学長代読) が挨拶の中で、基礎研究の重要性と寄附された湯川秀樹旧宅の活用予定、今後の発展について説明しました。続いて、柳澤好治 文部科学省研究振興局大学研究基盤整備課長、光石 衛 日本学術会議会長、廣井善二 東京大学物性研究所長、横山順一 東京大学国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構長、大栗博司 カリフォルニア工科大学ウォルター・パーク理論物理学研究所長、小野 薫 数理解析研究所長から来賓祝辞がありました。

式典終了後は、百周年時計台記念館国際交流ホールにて祝賀会を開催しました。はじめに青木所長の



梶田教授による講演 (講演会)



青木所長による式辞 (記念式典)



九後元所長による乾杯の発声 (祝賀会)

部局の
動き

挨拶があり、続いて九後太一 元基礎物理学研究所長の発声で乾杯しました。参加者の和やかな歓談の中、佐々木 節 東京大学国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構副機構長、常次宏一 東京大学物性研究所教授、野尻美保子 高エネルギー加速器研究機構教授、福嶋健二 東京大学理学研究科教授がスピーチを行い、若手研究者が支えた創設時代の逸話や、それぞれ研究所に関わった時代の苦労話、次の世代へさらなる研究の進展を望む声などが披露されました。

翌22日は、3名の研究者による分野レビュー講演のほか、記念討論会が行われ、盛況のうちに幕を閉じました。



祝賀会の様子



集合写真

(基礎物理学研究所)

[目次に戻る](#)

フィールド科学教育研究センター創設20周年記念式典・シンポジウムを開催

フィールド科学教育研究センター創設20周年記念式典・シンポジウムを、2023年11月19日(日)に対面とオンラインのハイブリッドで開催しました。

同センターは、2003年4月に農学研究科附属演習林(芦生・北海道・和歌山・上賀茂・徳山・北白川)、亜熱帯植物実験所および水産実験所、理学研究科附属瀬戸臨海実験所を統合した全学共同利用施設として創設されました。

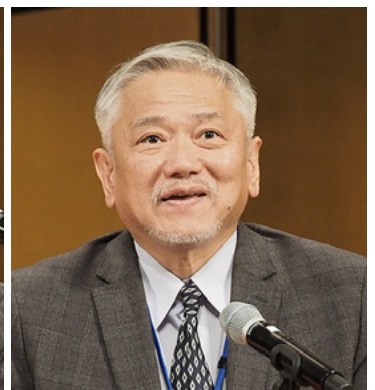
記念式典には学内外の関係者・一般市民と現構成員ら約250名が出席しました。朝倉 彰 同センター長が式辞を述べ、湊 長博 総長、関係部局長、梅原弘史 文部科学省高等



朝倉センター長



湊総長



田中耕一郎 理学研究科長

部局の
動き



澤山茂樹 農学研究科長



勝見 武 地球環境学学長



梅原課長



イオン株式会社 渡邊廣之 執行役副社長 (中央) を交えた集合写真

教育局専門教育課長 (ビデオメッセージ) から祝辞が贈られました。

シンポジウムでは、畠山重篤 同センター社会連携教授が「森は海の恋人 人の心に木を植える」と題した基調講演を行い、同センターとともに歩んだ20年を振り返りながら、気仙沼市舞根湾での教育研究活動や将来を担う人材育成について熱く語りました。

その後、同センターと連携している全国の高校11校を交えて、ポスターセッションを行いました。各高校からは、森里海連環学、海洋ごみ、放置竹林、環境DNA、水質や生態系調査といった課題についての研究発表がありました。また、大学教員や学生による研究ポスターも多数掲示され、公益財団法人イオン環境財団とともに進める「新しい里山・里海 共創プロジェクト」や、株式会社モンベルとの協働事業「山の健康診断」などの研究成果が発表されました。

続いて、初代センター長の田中 克 名誉教授、第4代センター長の吉岡崇仁 名誉教授、現



畠山社会連携教授



ポスターセッションの様子

部局の
動き



田中名誉教授



吉岡名誉教授



石原正恵 芦生研究林長



小林和也 北海道研究林長



下村通誉 瀬戸臨海実験所長



益田玲爾 舞鶴水産実験所長

センター長の朝倉教授が講演「フィールド研の誕生・歩みと未来」を行い、その後4施設長から「隔地施設における教育と研究の歩み」が紹介されました。

夕刻からの祝賀会では、学内外の関係者、OB・OG、教職員、学生も交えて、創設20周年を祝うとともに、研究発表ポスターを前に活発な学術交流があり、盛会のうちに終了しました。

記念式典とシンポジウムの講演映像は、同センター20周年記念サイトで公開しています。

【関連リンク】

フィールド科学教育研究センター20周年記念サイト

<https://fserc.kyoto-u.ac.jp/wp/20thann>

(フィールド科学教育研究センター)

[目次に戻る ↗](#)

宇治キャンパスで2023年度安全衛生講習会を開催

宇治キャンパスでは、2023年11月20日(月)に、宇治事業場衛生委員会主催、宇治キャンパス環境安全保健センター共催で、安全衛生講習会を、おうばくプラザきはだホールにて4年ぶりに対面形式で開催しました。本講習会は、宇治地区の教職員や大学院生などを対象に「年間安全衛生管理計画」の一環として、本学関係者や外部の有識経験者を招き開催しているものです。

コロナ禍を経て研究教育活動や業務の活発化に伴い、ケガ・事故などが多発するようになり、前例がないような大きなケガも発生しています。そこで今年度は、「宇治キャンパスで命を落とさないために」をテーマに掲げ、命そのもの、そして研究者生命、職務の遂行に直接深く関わる

部局の
動き

ような災害、事故・ケガを予防し回避するために、2名の講師による2部構成で開催しました。

はじめに、宇治事業場総括衛生管理者である中北英一 防災研究所長より開会の挨拶がありました。続く第1講演では、大鶴 繁 医学研究科教授を講師に迎え、「『医療における安全性』～平時から災害時に至るまで～」をテーマに、災害に備えた日頃の準備といざ災害が発生したときの対処など、医学部附属病院の最新の取り組みについて講演を行いました。第2講演では、元厚生労働省厚生労働技官の波多江利久 宇治事業場衛生工学衛生管理者より「『大学等研究機関における研究活動中の死亡事故および重大事故の傾向と対策』～心と身体の健康：先端研究活動と環境安全保健～」をテーマに、世界と国内の動き、新しい時代の安全衛生の考え方と、必ず知っておくべき注意点について、講演を行いました。

参加者は、興味深い内容に熱心に聞き入り、講演後も質疑応答が続き、盛会のうちに終了しました。



開催挨拶をする中北所長



講演を行う大鶴教授



講演を行う波多江衛生工学衛生管理者

(宇治地区事務部)

[目次に戻る ↗](#)

「京都大学宇治おうばくプラザ 第13回たそがれコンサート」を開催

2023年12月1日(金)に宇治キャンパスの宇治おうばくプラザにて、「京都大学宇治おうばくプラザ 第13回たそがれコンサート」を開催しました。本コンサートは、本学と地域の方々との交流を深めることを目的として、2010年度から開催しているものです。今回は京都大学音楽研究会器楽部を迎え、市民ら約230名が来場しました。

はじめに中北英一 防災研究所長の開催挨拶および連携協定を締結している宇治市の松村淳子 市長による来賓挨拶がありました。その後、京都大学音楽研究会器楽部によるピアノ独奏、ピアノ四重奏など



開催挨拶をする中北所長



来賓挨拶をする松村市長

部局の
動き

の演奏が行われ、来場者は熱心に耳を傾けていました。

最後に、中北所長より閉会挨拶があり、本コンサートは盛況のうちに幕を閉じました。



京都大学音楽研究会器楽部によるピアノ独奏



京都大学音楽研究会器楽部によるピアノ四重奏

(宇治地区事務部)

[目次に戻る ↗](#)

寸言

熱帯雨林への挑戦

島田 卓



それは修士1年の冬の出来事だった。当時私が所属していた研究室は伝統的に、有機化学を基礎として、生理活性をもつ天然由来化合物の構造を解析し、合成し、活性の機構を明らかにすることを主な研究活動としていたが、その時代にはもう、自ら天然物を採取してくることはほとんどなくラボワークが中心であった。我々を驚かせた出来事とは、研究室のK教授によって、アフリカ熱帯雨林でのフィールドワークの話が持ち込まれたことであった。

最初は、当時の霊長類研究所の河合雅雄先生からの依頼で、サルたちが食している植物の中に明らかに苦くて栄養もなさそうなものがあって、葉代わりに食べていると予想されるため、栄養分析してもらいたいという話であった。栄養分析は当室の得意分野ではないためK教授は丁重にお断りしたが、何故か話が弾み、河合研究室の調査地の一つであるカメルーンの熱帯雨林には手つかずの植物が沢山あり、色々な生理活性物質も見つかるに違いない、文部省に海外調査の申請を出そう、ということになったらしい。さらに、K教授の予想(期待)に反して申請が採択されてしまった。

K教授の覚えがめでたくなかった私であったが、現地公用語であるフランス語を習得することを条件に、唯一の学生枠、すなわち肉体労働枠で調査に参加することを許された。アフリカの熱帯雨林にはマラリアやフィラリアを始めとする多くの感染症とそれを媒介する生物たちがいるため、出発前には沢山のワクチンを打ち、トランジットで立ち寄ったパリでは、日本では入手できない感染症予防薬を購入して、カメルーンに乗り込んだ。私自身、学部時代はワンダーフォーゲル部に所属して国内の高山や西表島のジャングルにも親しんでいたため体力と適応力には自信があったが、一方、当時助手だった現場監督役のO先生にとっては、「きみも無事で帰れると思うなよ」と仰るほど決死の覚悟であった。ジャングルでは現地のトラックを雇って植物採集を行う傍ら、森の中に簡易ラボを設営し生理活性を調べるアッセイを行ったりして、修士2年の1月末、O先生ともども、沢山の試料を携えて2ヶ月半の海外調査から無事生還した。

帰国後まもなく、修士を修了して大手食品会社に就職した私であるが、4年も経たずに飛び出して、京都大学の先輩が興したバイオベンチャー(当時はそういう言葉もなかった)に入り、その後、色々な縁があって今の会社を興すに至った。思えば、常に人の縁、それも京都大学の先輩後輩とのつながりのなかで新しいチャレンジがあり、それに飛び込んでいくことで大きな転換点を乗り越えてきたように思う。それも、学生時代に熱帯雨林の調査に連れて行ってもらったことが原点かも知れない。

学生諸君には、クラブや同期、同窓の人の縁を大事にすると同時に、京大生らしいチャレンジ精神を持ち続けていただきたい。

(しまだ たかし、株式会社フェニックスバイオ代表取締役社長、昭和57年農学部卒業)

[目次に戻る ↗](#)

随想

半世紀ぶりの
自作の真空管アンプ

名誉教授 富田 恭彦



七人家族の中で育ちましたが、こどもの一人を亡くし、「かみさん」にも退職とともに先立たれ、今は一人です。かみさんの病気がわかったのは教授昇進の直前でした。包丁の使い方、ごはんの作り方を彼女から教わり、以来ずっと家族のごはんを作ってから出勤する生活でしたから、今も食べるものだけは自炊でなんとかできます。ありがたいと思っています。サバの味噌煮とかグラタンとか、まだ結構自分で作れます。ただ、いろんなことがありすぎたためでしょうか、正直に申しますと、空しさが通奏低音の日々です。

そんな日々の中で、コロナ禍が始まる前年に、こどものアドバイスもあり、ほぼ50年ぶりに真空管アンプを復活させました。作ったのは京大に入って2年目、19歳のときでした。もうとくに真空管の時代ではなくなっていました。小学2年生の時に電気電子のとりこになり、高校まで真空管を使っていろいろやっていました。京大の2回生のとき、河原町通りの電気屋さんのウインドウに新品の42という電力増幅管が2本並べられているのに出会い、運命のような気がして購入しました。(しばらく食費を節約することになりました。あはは。)それで、記念にと、42とともに、整流管に5Y3GT、電圧増幅管に6AU6を使って、プチ真空管博物館みたいなアンプを作りました。それが最後の自作アンプでした。

かみさんと学生結婚し、こどもが生まれ、仕事に追われ、趣味の時間を確保するゆとりもなく、また最初のアパートは狭くてスピーカーシステムは解体し、かろうじてアンプとむき出しのスピーカーを段ボール箱に入れて押し入れに。それから約半世紀経ちました。

2019年の秋に、京大でイベントがあった帰り道、京都駅前の量販店で、年金暮らしの者には不相応なレコードプレーヤーを購入しました。それで、昔聴いていたシルヴィ・バルタンの中古のアルバムを市役所の近くで購入してかけてみたら、ななんと、ちゃんと音が出るではありませんか。それで、コロナ禍の中、学会の仕事と並行してバックロードホーン型のスピーカーシステムを、ホームセンターで材料を求めて作り直し、パーツもほぼすべて、まだ手に入るものに交換して、以来、毎日聴くようになりました。基本、1960年代のポップスです。一番よく聴くのは、かみさんと同じ病気で最近亡くなられたこともあってか、レコードの復刻版が多数出ているフランス・ギャルのアルバムです。多分、かみさんと出会った頃のいい時代を重ねているんだろうなあと、自己分析しています。あはは。

今年また新たな科研費がいただけることになりました。なんとか工夫をして、極力最後まで、こどもたちのためにも元気を出して頑張らないといけないと思う日々です。

最後になりましたが、研究科長職にありましたときには、全学の先生方、職員のみなさまに、大変お世話になりました。この場をお借りして、改めて心より御礼を申し上げます。

(とみだ やすひこ、平成29年退職、元大学院人間・環境学研究科教授、
専門は哲学/自然科学史)

[目次に戻る ↗](#)

洛書

研究所の渡り歩きの記

奥地 拓生



十年に一度くらいの頻度で、使命と性格が異なる国立大学の附置研究所3か所と、学部1か所の間を異動してきた。それぞれの異動が、私の研究の進め方や学生との関係を大きく変えた。大学教員としては特別に珍しくはない仕事の側面の一つなのかもしれないが、考えた末の題材ということで、それらの経緯を記す次第である。

研究人生の出発点において、北のほうにある雪と氷の研究所に少しお世話になった。時間がゆったりと流れ、そこで営む学問の現在と未来をしっかりと議論することができる場であった。実験室はまだ作れなかったが、以後長く続く研究の仕事への熱源のようなものをもらった。

次の理系の学部では、実習・演習・ゼミをたくさん行い、卒論の学生を受け持った。フィールドワークで野山に学生を連れていき、逆に学生に指名を受けて連れていかれた。一つ目の実験室を作り、最後の方は長期留学もさせてもらった（その行先も研究所で、二つ目の実験室を作ってきた）。最初の熱源をもとに、深夜まで一人で研究を深堀りしていた。

次は地球と惑星の物質の研究所であった。メインキャンパスから県境の峠を越えて車で2時間かかる山間地にあり、やはり時間はゆったりと流れていた。遠隔地だが関連分野の来訪者に恵まれ、外国からも学生や研究者が来てくれた。三つ目の実験室を作り、来訪者や留学生と一緒に実験に没頭した。研究の深堀りは仲間を得て大いに進んだ。

次が現所属の学際・複合領域の研究所であった。メインキャンパス（京都）から県を越えて2時間以上かかるところは偶然か必然なのか、よく似ている。研究所なので研究するよ、という文句が効くのかどうか、ここを選んだ研究室の学生は基本的に良くやってくれる。一方で、あたりまえのことだが、研究の目的はそのためには本質的である。しかし深堀りだけしていても、学生がのめりこんでやりたくなるような課題は出てこない。そこで、これまで経験を積んできた鉱物（無機酸化物）の合成と解析に係る範囲で、学際的に使えるような装置と道具をたくさん置いて個々に動かせるような、四つ目の実験室づくりをはじめた。必要なものは多く、所内外から中古品をもらい集めた。古い装置を動かせたなら、むしろ気兼ねなく好きな研究に使い倒せる。研究の道具を使いこなす努力は立派な研究である。

装置と道具を集めながら、これをこう使えばこんなことができるという利用法をとにかく提案した。学生たちはその中で自分の研究の構想をなんとか考え出し、そのための装置や道具を選び、使っては直し、結果として実験室に魂を入れてくれた。それぞれの実験の結果は既に期待を超えている。これまでで一番いい実験室になったが、これは渡り歩きの後でなければ作りようのないものでもあった。

私のように似たところを掘っていたいが、私よりずっと若い研究者が、広い学問の世界をいざれ渡り歩くに至るためには、それぞれの場所での深堀りを許容できる、懐の深い研究所がいくつも要る。頻繁な渡り歩きは逆に有害にもなり得るので、各場所を仕切り直したり均したりのメンテナンスも、まあたまに行う限りがよいのかもしれない。そのような渡り歩きの中継所としての研究所の営みが今後も続いていくことを、やはり願わずにはいられない。

（おくち たくお、複合原子力科学研究所教授、協力講座として工学研究科機械理工学専攻、
専門は鉱物学、中性子散乱）

[目次に戻る ↗](#)

栄誉

佐和隆光 名誉教授が日本学士院会員に選出

2023年12月12日(火)、佐和隆光 名誉教授が日本学士院会員に選出されました。

日本学士院は、学術上功績顕著な科学者を優遇するための機関として文部科学省に設置されており、学術の発展に寄与するため必要な事業を行うことを目的としています。

【関連リンク】

主要な学術上の業績などは、以下のWebサイトをご参照ください。

日本学士院会員の選定について | 日本学士院

<https://www.japan-acad.go.jp/japanese/news/2023/121201.html>

(経済研究所)

[目次に戻る ↗](#)



平井豊博 医学研究科教授、半田知宏 同特定准教授、後藤慎平 iPS細胞研究所教授がベルツ賞を受賞

この度、平井豊博 医学研究科教授、半田知宏 同特定准教授、後藤慎平 iPS細胞研究所教授の「間質性肺疾患の病態解明を目指した臨床・基礎研究」に関する論文が、エルウィン・フォン・ベルツ賞2等賞を受賞しました。

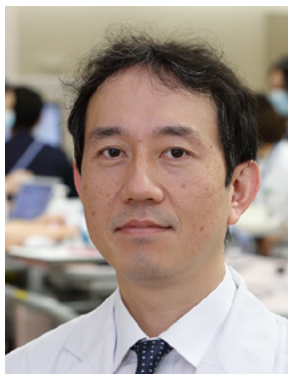
同賞は、医学研究の分野において日独国際間の協力を推進し、日本における医学会の研究活動を支援する目的で、ドイツの製薬会社ベーリンガーインゲルハイム社によって、1964年に創設されました。毎年特定の医学の分野に関する学術論文を募集し、優秀な論文に対して授与されます。

基礎と臨床双方向からの間質性肺疾患の病態解明を目指し、人工知能、数理モデル、iPS細胞、オルガノイドなど先端的手法を駆使し研究を推進していること、臨床的には胸部CT画像定量化技術を開発するとともに、予後予測に有用な血清・気管支肺泡洗浄液のバイオマーカーを同定したこと、基礎的には世界に先駆けてiPS細胞から肺胞上皮を分化誘導し、長期培養する技術を開発、希少疾患を含む間質性肺炎の病態解明と創薬研究を展開していることなどが高く評価され、この度の受賞となりました。

贈呈式は、2023年12月1日(金)にドイツ大使公邸にて行われました。



平井教授



半田特定准教授



後藤教授

栄誉



贈呈式の様子

【関連リンク】

日本ベーリンガーインゲルハイム、「間質性肺疾患」をテーマとした、第60回「ベルツ賞」受賞者を発表 | Boehringer Ingelheim Japan

<https://www.boehringer-ingelheim.com/jp/press-release/20231201-02>

ベルツ賞 | Boehringer Ingelheim Japan

<https://www.boehringer-ingelheim.com/jp/corporate-profile/belz-prize>

(渉外部 (広報課))

[目次に戻る ↗](#)

井上浩輔 白眉センター／医学研究科特定准教授、遠藤礼子 工学研究科研究員が MIT テクノロジーレビュー主催「Innovators Under 35 Japan 2023」に選出

井上浩輔 白眉センター／医学研究科特定准教授および遠藤礼子 工学研究科研究員が、MIT テクノロジーレビュー（日本版）主催の「Innovators Under 35 Japan 2023」において、未来を創る35歳未満のイノベーターに選出されました。

「Innovators Under 35」は、米国マサチューセッツ工科大学（MIT）のメディア部門「MIT テクノロジーレビュー」

が主催する国際アワードです。世界的な課題解決に取り組み、向こう数十年間の未来を形作る、独創的で才能ある35歳未満の若きイノベーターの発掘を目的とし、過去にはGoogle 共同創業者のセルゲイ・ブリン氏、Facebook 共同創業者兼会長兼 CEO のマーク・ザッカーバーグ氏も受賞するなど、国際的に権威あるアワードとして高く評価されています。



井上特定准教授



遠藤研究員

栄誉

井上特定准教授は「高ベネフィット・アプローチ」という次世代の個別化医療の概念を世界に先駆けて提唱した功績を、遠藤研究員はアメリカおよび日本における下水サーベイランスの社会実装をリードしてきた功績を評価され、この度の選出となりました。

井上特定准教授のコメント

このような素晴らしい賞に選出いただき、大変嬉しく思います。家族やメンター、所属先メンバーをはじめ日々支えていただいている皆様に感謝いたします。私たちの提唱する高ベネフィット・アプローチが、医療の枠を超えて広く受け入れられ、より良い社会へ貢献できるよう、引き続き研究に精進いたします。

遠藤研究員のコメント

COVID-19パンデミックを機に世界中で下水サーベイランスへの注目が集まり、各国は次なるパンデミックへの備えとして下水サーベイランスを導入している一方、日本での導入はまだ限定的です。産官学連携で日本に合った下水サーベイランスの役割と社会実装の方法をこれからも模索したいと思います。

【関連リンク】

Innovators Under 35 Japan | MITテクノロジーレビュー

<https://techreview.jp.com/iu35/2023/>

高血圧診療における次世代の個別化医療戦略を提唱 - 機械学習により個人の治療効果を予測する時代へ -

<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2023-04-05>

滋賀県における新型コロナ下水サーベイランス | 流域圏総合環境質研究センター

<https://www.eqc.kyoto-u.ac.jp/surveillance/>

(渉外部 (広報課))

[目次に戻る ↗](#)

小俣ラポー日登美 白眉センター特定准教授がサントリー学芸賞 [社会・風俗部門] を受賞

小俣ラポー日登美 白眉センター/人文科学研究所特定准教授が、「第45回(2023年度)サントリー学芸賞[社会・風俗部門]」を受賞しました。受賞作は「殉教の日本 近世ヨーロッパにおける宣教のレトリック」(名古屋大学出版会)です。

サントリー学芸賞は、広く社会と文化を考える独創的で優れた研究・評論活動を、著作を通じて行った個人を顕彰する賞で、1979年の創設以来、受賞者の業績は、主題への斬新なアプローチ、従来の学問の境界領域での研究、フロンティアの開拓などの点で高く評価されています。既存の枠組にとらわれない自由な評論・研究活動に光を当てることは、本賞の重要な役割となっています。

なお、受賞式は2023年12月11日(月)に東京にて開催されました。

本書の概要

16世紀末から日本列島で見られたキリスト教徒への迫害とその殉教は、同時代の西欧カ



小俣特定准教授

栄誉

トリック社会内部で語られ、描かれ、さらには文芸のモチーフとして反復される中で類型化された文化的表象へと昇華し、そして歴史的な記憶となりました。この長期の過程を、宣教報告・殉教事件の検証裁判資料といった手稿の一次資料、それに基づいた刊行物、イメージ、文学作品といったヨーロッパの複数の言語圏にわたる多様な二次・三次資料の分析を通じて明らかにしようと試みたのが本書です。この記憶は、明治期以降の日本では西欧的価値観と共に広く受容され、その結果、殉教者の栄光の過去は、日本の歴史およびアイデンティティの一部ともなっていました。時代・言語圏・文化圏をまたがり歴史的言説は往還し、過去の記憶の形成そのものが、その歴史文化の交錯を体現しているのです。殉教言説の構築過程の顕彰は、このような歴史のダイナミズムを明らかにするためには、まさに好適な題材であったと言えるでしょう。



近世ヨーロッパにおける殉教の歴史は、プロテスタントの殉教者から、聖（せい）母（ぼ）マリアの信仰にまで及ぶ。長編二十六巻の歴史を、歴史学・宗教学・社会学・政治学・文化学などから、果敢をもって書かれた「殉教の歴史」を実現する。

なぜ「暴虐と聖性の国」
となったのか

監修 田辺理 2023年11月 名古屋大学出版会

受賞作『殉教の日本』

【関連リンク】

殉教の日本 « 名古屋大学出版会

<https://www.unp.or.jp/ISBN/ISBN978-4-8158-1119-8.html>

第45回 サントリー学芸賞決定 2023年11月14日 ニュースリリース サントリー

<https://www.suntory.co.jp/news/article/14496-1.html>

第45回 サントリー学芸賞 選評 2023年11月14日 ニュースリリース サントリー

<https://www.suntory.co.jp/news/article/14496-3.html>

(白眉センター)

[目次に戻る ↗](#)

田辺 理 白眉センター特定准教授が「第35回国華奨励賞」を受賞

田辺 理 白眉センター／文学研究科特定准教授が、「第35回国華奨励賞」を受賞しました。

「國華賞」は、1889(明治22)年に岡倉天心らが創刊した東洋美術雑誌『國華』の創刊100年を記念して創設され、日本および東洋の美術に関する優れた研究に贈られます。過去1年間に刊行された書籍、雑誌・紀要などに掲載された論文、展覧会図録が選考対象で、國華奨励賞は、同賞のうち、若手研究者に贈られるものです。



受賞式の様子

田辺特定准教授は、パキスタンとアフガニスタンにおいて2世紀から4世紀の間に栄えたガンダーラの仏教彫刻に見られる、飲酒饗宴図や海獣などの、一見ただけでは仏教と関係があるか否かわからない図像の考察を行い、それらの図像が、帝政ローマ時代の石棺の表面に表現

栄誉

された美術と同種のものであると比定しました。さらに、このような彫刻は、仏教寺院に飾られていたものであるため、何らかの仏教的な意味が秘められているのではないかと推測し、小乗部派仏教に取り入れられたインド古来の生天思想と関連づけて、その図像の解釈を試みました。本研究が斬新であり、ガンダーラの仏教美術研究を一步推進したと評価されて、このたびの受賞となりました。

なお、受賞式は2023年10月26日(木)に朝日新聞社本社にて行われました。

【関連リンク】

國華賞 | 朝日新聞社

<https://www.asahi.com/corporate/award/14448678>

(白眉センター)

[目次に戻る ↗](#)

話題

令和5年度総長杯ボウリング大会を開催

2023年11月17日(金)午後6時30分からROUND1京都河原町店にて、令和5年度総長杯ボウリング大会を開催しました。新型コロナウイルス感染症による中断を経て、4年ぶりの開催となった今回の大会には、39チーム172名が参加しました。会場では一投ごとに大きな歓声が上がリ、和気あいあいとした雰囲気の中、参加者の笑顔溢れるにぎやかな大会となりました。

大会結果は次のとおりです。

<団体>

優勝：施設部「施設-Gチーム」(1,268ピン)

準優勝：医学部附属病院「病院事務部選抜Aチーム」(1,156ピン)

<個人>

優勝(男性)：向山 和希(施設部・379ピン)

優勝(女性)：数藤 茜(医学部附属病院・367ピン)



優勝した施設部「施設-Gチーム」と、個人優勝者(男性の部)の向山さん(右から2人目)



準優勝した医学部附属病院「病院事務部選抜Aチーム」と、個人優勝者(女性の部)の数藤さん(前列中央)

(人事部(人事企画課))

[目次に戻る ↗](#)

「業務支援室ニュースレター」を創刊

業務支援室の役割と活動を広く周知することを目的として、「業務支援室ニュースレター」を創刊しました。

業務支援室は、WINDOW構想(Diverse and Dynamic)におけるダイバーシティ推進のもと、障害者雇用の促進の一環として2018年4月に人事部職員育成課に設置されました。本学で働く障害者と雇用部署の業務指導、採用・定着サポートを通じて、障害者就労の実現と障害者雇用の促進と安定を図っています。

厚生労働省公表の2022年の「障害者雇用状況」では、雇用障害者数、実雇用率ともに過去最高を更新しました。政府が義務づけている障害者の雇用割合である法定雇用率の段階的な引き上げ方針も決定されています。また、近年、少子高齢化により加速する人手不足やSDGs、ダイバーシ



創刊号表紙

話題

ティ・インクルージングの機運の高まりを背景として、「障害者雇用」への積極的な取り組みが社会的課題となっています。

業務支援室では、本課題解決に向けたさまざまなアプローチを実践し、その実践を発信することにより、本学教職員をはじめ、障害当事者や就労支援機関とともに、新たな障害者雇用の形を模索したいと考えています。ニュースレターの小さな記事からはじまる「人・社会・仕事 障害者雇用でつながる」未来の創造を目指して、皆さまに業務支援室をより身近に感じていただけるように発信していきます。

【関連リンク】

業務支援室ニュースレターは、以下のページにてご覧いただけます。

NEWSLETTER No.1 (2023.11) を発行しました。 | 障害者雇用-京都大学業務支援室

<https://gyoumu-shien.adm.kyoto-u.ac.jp/news/newsletter-no-1/>

(人事部 (職員育成課))

[目次に戻る ↗](#)

学部生の研究チーム「iGEM Kyoto」が合成生物学の国際大会 iGEM で金賞を受賞

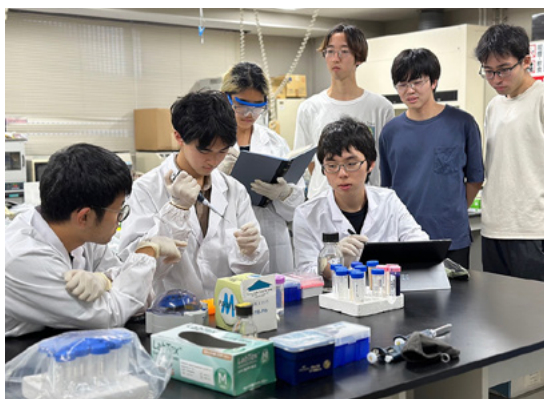
学部生による研究チーム「iGEM Kyoto」が、2023年11月2日(木)から5日(日)までフランス・パリで開催されたiGEM 2023 GRAND Jamboreeに出場し、金賞を受賞しました。また同時に Best Agriculture Project、Best Wiki、Best Hardwareの各最終候補にもノミネートされ、チーム始まって以来の最高の成績を達成しました。

iGEM (International Genetically Engineered Machine competition) は、2003年から米国で開催されてきた合成生物学の学生研究コンテストであり、同チームは2008年から参加しています。創立20周年にあたる今年にはパリのポルトバルサイユ国際展示場で開催され、世界66カ国から400を超えるチームと5,000名を超える参加者が研究成果を競いました。

iGEM Kyotoは、「Avoideer」と題したプロジェクトに取り組み、農作物に対する鹿による食



表彰式後の集合写真



実験室での作業の様子



発表の準備の様子



害を合成生物学の力で防ぐ研究を行いました。遺伝子組換え実験に加えて、数理モデリング、ハードウェアの作成、高校生への教育活動など、幅広い活動が高く評価されました。

【関連リンク】

iGEM Grand Jamboree

<https://jamboree.igem.org/2023/home>

Kyoto: Avoideer - From the Flask to the Field - (2023) - Team Presentation

[English] - iGEM Video Universe (iGEM Kyoto 2023 プレゼンテーションビデオ)

<https://video.igem.org/w/rgTnxoL6HzMxtvEphNzwX2>

Kyoto - iGEM 2023 (iGEM Kyoto 2023 Wiki)

<https://2023.igem.wiki/kyoto/>

iGEM Kyoto

<https://igemkyotoofficial.github.io/>

(医生物学研究所)

[目次に戻る ↗](#)

訃報

このたび、作花濟夫 名誉教授、中川博次 名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介します。

作花 濟夫 名誉教授

作花濟夫先生は、令和5年11月13日に逝去されました。享年93。

先生は、昭和28年に京都大学工学部工業化学科を卒業され、当時高槻市（大阪府）にあった同大学化学研究所に助手として奉職されました。昭和38年に京都大学工学博士を授与されるとともに助教授に昇任され、昭和47年に三重大学工学部工業化学科に教授として迎えられました。昭和58年には京都大学化学研究所窯業化学研究部門（平成4年から無機素材化学研究部門に組織変更）担当の教授に就任され、平成6年に停年により退官され、名誉教授の称号を受けられました。この間、昭和40～43年に米国レンセラー工科大学で博士研究員として在外研究を行われ、平成2～4年には京都大学化学研究所長・同大学評議員を務められました。退官後は、平成15年まで福井工業大学客員教授を務められました。



先生はガラス研究の大家であるとともに、今では周知の用語となったゾルーゲル法の、文字通りの開拓者でした。先生のご研究は広がり大きいもので、「無機ガラスの構造の解明」「無機ガラスの機能物性の開拓」「機能性無機材料のゾルーゲル低温合成」に大別することができ、その研究成果は約300篇の研究論文と100篇余の総説として国内外の専門誌上に結実しています。「ガラスハンドブック」（朝倉書店）、「ガラス非晶質の科学」（内田老鶴圃）、「ゾルーゲル法の科学」（アグネ承風社）をはじめ、著書・編書が15冊余と多数あり、無機材料化学に関わる若い研究者や大学院生に多大な影響を与えてきました。

国際的には、Journal of Non-Crystalline SolidsのRegional Editor（昭和56～平成4年）、Journal of Sol-Gel Science and Technologyの初代Editor-in-Chief（平成4～19年）を務められるとともに、6th Physics of Non-Crystalline Solids（昭和62年）、4th International Workshop on Glass and Glass Ceramics from Gels（昭和62年）、The Japan-Russia-China International Seminar on the Structure and Formation of Glasses（平成3年）の組織委員長を務められ、学术界に多大な貢献をされました。

これらの功績・貢献は国内外の学会から称えられ、窯業協会（現日本セラミックス協会）からは進歩賞（昭和40年）と学術賞（昭和54年）を、日本セラミックス協会からは名誉会員の称号（平成18年）とセラミックス大賞（平成31年）を、日本化学会からは学会賞（昭和63年）を、さらに、The American Ceramic SocietyからはFellowの称号（昭和58年）とG. W. Morey Award（昭和59年）を、International Sol-Gel SocietyからはLife Achievement Award（平成19年）を、International Commission on GlassからはPresident's Award

訃報

(平成25年)を授与されています。平成8年には紫綬褒章を、平成15年には勲二等瑞宝章を受章されました。

飾らぬお人柄で、会話に短いジョークを交えてご自身と相手をクスリと笑わせることが終生変わりませんでした。ご退職後も日本ゾルーゲル学会、日本セラミックス協会関西支部、ニューガラス研究会の諸行事に参加され、熱心にメモを取られ、コロナが収束に向かった2023年にも積極的に行事に参加しておられた中での急逝でした。先生をよく存じ上げる国内外の方々の驚きと悲嘆には、察するに余りあるものがあります。

(化学研究所)

[目次に戻る](#)

中川 博次 名誉教授

中川博次先生は、令和5年10月27日逝去されました。享年91。

先生は、昭和29年京都大学工学部土木工学科を卒業、昭和31年同大学院工学研究科修士課程を修了されました。同年建設省土木研究所に入省、同研究所ダム水理研究室長を経て、昭和39年4月京都大学防災研究所助教授に採用され、昭和44年同大学工学部教授に就任、土木工学科水理学講座を担当されました。平成7年停年により退官され、名誉教授の称号を受けられました。この間、昭和63年11月から平成2年11月まで京都大学評議員、平成3年4月から平成5年3月まで工学部長ならびに大学院工学研究科長として、大学の管理運営、とりわけ大学院重点化および学部6系学科体制の整備に多大なる貢献をされました。本学退官後は、平成7年4月から立命館大学理工学部教授に就任、平成15年4月より同大学客員教授を務められました。



先生は我が国の開水路水理学研究の開拓者の一人として、開水路乱流および流砂水理学に関する基礎研究から水工設計についての応用研究に至る広範囲な領域において、多くの優れた研究業績を残されました。精密計測により得られた開水路流の滑面・粗面乱流構造に関する先駆的な研究成果『開水路流の乱流構造に関する研究』に対して土木学会論文賞を受賞されました。さらに、河川の土砂輸送の基礎学理である流砂水理学において確率過程論的流砂理論を確立され、理論体系を成書『移動床流れの水理』として出版、固液混相流の力学を基礎とする現代の流砂水理学への道を拓かれました。また、ケニア国ジョモケニヤツタ農工大学では創設時から20余年にわたり教育・研究指導に尽力され、外務大臣表彰、国際交流功労者文部科学大臣表彰を受けられるとともに、ジョモケニヤツタ農工大学名誉博士号を授与されました。

そのほか、先生は土木学会副会長、日本混相流学会副会長など、学会の要職を歴任され、学術の振興に貢献されました。また、水資源開発審議会会長、国土審議会委員など、国土庁、文部省、建設省、国土交通省において多数の審議会専門委員等も務められ、長期にわたり建設行政への学術的視点からの指導を続けてこられました。これら一連の教育・研究活動、学

訃報

界活動などにより、平成22年4月瑞宝中綬章を受けられました。このように先生は、水工学・水理学の分野、特に開水路乱流、流砂水理学、水理構造物の機能設計の専門分野において多数の傑出した研究業績を残され、斯学の発展に比類なき貢献をされました。

(大学院工学研究科)

[目次に戻る ↗](#)